

都ぞ弥生

(明治四十五年寮歌)

横山芳介君 作歌
赤木顕次君 作曲

一

都ぞ弥生の雲紫に
花の香漂ふ宴遊の筵
尽きせぬ奢に濃き紅や
その春暮れては移らふ色の
夢こそ一時青き繁みに
燃えなん我胸想ひを載せて
星影冴かに光れる北を
人の世の清き国ぞとあこがれぬ

二

豊かに稔れる石狩の野に
雁遙々沈みてゆけば
羊群声なく牧舎に帰り
手稲の嶺黄昏こめぬ
雄々しく聳ゆる楡の梢
打振る野分に破壊の葉音の
さやめく蜩に久遠の光り
おごそかに北極星を仰ぐ哉

三

寒月懸れる針葉樹林
櫓の音凍りて物皆寒く
野もせに乱る清白の雪
沈黙の暁霏々として舞ふ
ああその朔風細々として
荒ぶる吹雪の逆巻くを見よ
ああその蒼空梢聯ねて
樹氷咲く壮麗の地をここに見よ

四

牧場の若草陽炎燃えて
森には桂の新緑萌し
雲ゆく雲雀に延齡草の
真白の花影さゆらぎて立つ
今こそ溢れぬ清和の陽光
小河の濤をさまよひゆけば
うつくしからずや咲く水芭蕉
春の日のこの北の国幸多し

五

朝雲流れて金色に照り
平原果てなき東の際
連なる山脈玲瓏として
今しも輝く紫紺の雪に
自然の藝術を懷みつ
高鳴る血潮のほとばしりもて
貴とき野心の訓へ培ひ
榮え行く我等が寮を誇らずや